やまと万葉がたり

鶯の木伝ふ梅のうつろへば桜の花の時片設けぬ

作者未詳（巻十・一八五四）

万葉文化館の庭園では、薄紅色のしだれ梅が満開です。紅白の梅も咲いてきました。まだまだ寒い日もありますが、梅の花が咲くと暖かい季節がそこまで来ていると感じます。

1200年以上昔の人々も同じことを感じていたようです。この歌では、梅の花が咲いた次は桜の花の咲く番だ、とその花の時期を心待ちにしている様子が詠まれています。ウグイスが枝から枝へと伝いつつ鳴いていた梅の木、という具体的な情景描写は、のどかで美しい早春の景色を想像させてくれます。

「うつろふ」とは花や木の葉が色あせたり散ったりすることをいい、ここでは梅の花が次々に散っていくことを表現しています。また「片」は半ば、「設く」は準備する意味で、「時片設く」は時が心に準備される、時が近づくのを待ち受けること、といえます。

巻十の「花を詠む」という題のもとに集められたうちの一首で、平安時代以降は「花」といえば桜を指しますが「万葉集」においては梅も桜も当てはまったようです。ただし、この歌からは、桜への愛着の方がより強かった可能性もうかがえます。

よく似た発想を詠んだ歌に、令和ゆかりの「梅花の歌三十二首」のうちの一首「梅の花　咲きて散りなば　桜花　継ぎて咲くべくなりにてあらずや」（巻五・八二九）もあります。梅の花が咲き、散ってしまったら、桜の花が続けて咲くようになっているではないか、という内容です。

巻十は巻八とともに歌を四季で分類した巻ですが、巻十には作者も作歌年代もわからない歌が収められました。ただし、新しい表現の歌が多いという指摘もあります。実際に一八五四番歌は後世の人々に好まれ、鎌倉時代の勅撰集である「風雅集」にも収められています。

（県立万葉文化館指導研究員・井上さやか）

【訳】ウグイスがその枝を伝いつつ鳴いた梅の、花が散っていくと、桜の時期が待たれもすることだ。

＝次回は3月4日